

文化

千代田  
316011

## 【連続講座】

## 武士の権力論 第七弾

## 講座概要

武士といっても源頼朝（みなもとのよりとも）、足利尊氏（あしかがたかうじ）、織田信長（おだのぶなが）、徳川家康（とくがわいえやす）など、人物によって武士に対するイメージが異なると思います。平安時代後期に誕生する武士と江戸時代の武士とは武士と言っても相当こととなります。武士とはそもそもどういう存在か。

そうした、素朴な疑問を「権力」という視点から考える講座の第7弾です。

今回の連続講座では、武士のもつ「権力」という視点から、特に戦国武将を中心とした武士に焦点をあてます。

講座No.	日 程	講 師	タイトル
316011	全講座（7回）		
316011a	4月21日（日）	本学教養教育リサーチセンター研究員 東京大学史料編纂所非常勤職員 生駒 哲郎	鎌倉時代の北条氏は明治維新にとっては悪か
316011b	5月12日（日）	本学非常勤講師・武蔵野学院大学教授 高橋 恵美子	文献史料からみる中世武士の「徳」
316011c	6月2日（日）	國學院大學非常勤講師 丸島 和洋	川中島合戦を捉え直す
316011d	6月16日（日）	大正大学専任講師 木下 昌規	戦国期足利将軍家と政所伊勢氏
316011e	7月14日（日）	國學院大學兼任講師・立正大学非常勤講師 堀越 祐一	織豊政権と徳川政権 —その類似点と相違点を考える—
316011f	7月28日（日）	日本大学助教 小川 雄	水野氏からみた尾張・三河の戦国時代
316011g	8月4日（日）	東洋大学非常勤講師 柴 裕之	明智光秀の「実像」
時 間	13:00～14:30		
受 講 料	*全講座（7回）お申込み 10,000円（全7回） *お好みの講座を選んでお申込み 1,500円（1講座につき）		
場 所	千代田サテライト教室（武蔵野大学附属千代田高等学院・千代田女学園中学校内）		

・駐輪場、駐車場はありませんのでご了承ください。

担当講師	講義内容
講座No. 316011a	鎌倉時代の北条氏は明治維新にとっては悪か
<p>本学教養教育リサーチセンター研究員 東京大学史料編纂所非常勤職員</p> <p>生駒 哲郎</p>	<p>承久の乱(承久3年&lt;1221&gt;)は、後鳥羽院(ごとばいん)が討幕の意をかため、朝廷と鎌倉幕府が武力衝突した乱です。そして、朝廷が幕府に大敗するという日本史上の画期となる事件となります。この乱を契機に武士の世が決定的になります。</p> <p>しかし、明治維新後、天皇親政(しんせい)を絶対視する政府からは、私たちが歴史の授業でならった、三代将軍の後の源実朝亡き後の北条氏の執権政治は、朝廷と衝突し武力をふるったとんでもない時代という位置づけです。</p> <p>維新後の研究者が鎌倉時代の北条氏をどう捉えたのかを検討し、私たちの歴史教科書にどう反映されてきたのかを考えます。</p>
講座No. 316011b	文献史料からみる中世武士の「徳」
<p>本学非常勤講師・武蔵野学院大学教授</p> <p>高橋 恵美子</p>	<p>明治時代に新渡戸稲造によって世界に紹介された武士の精神とされる「武士道」ですが、その呼称はあくまで江戸時代以降のものであり、中世の武士による自己意識の表現は種々様々なものがみられますが、具体的な言及は多くはありません。しかし中世を通して武士が自己認識として「武士たる者」をどうとらえていたかは、わずかながら当時の記録史料から伺い知ることができます。本講座では、中世の記録、物語史料などの表現にあらわれる武士の誉や必要とされる徳について記された文章に注目し、中世武士が榮譽を得るに相応しいと考えた要素がいかなるものであったかを確認します。</p>
講座No. 316011c	川中島合戦を捉え直す
<p>國學院大學非常勤講師</p> <p>丸島 和洋</p>	<p>甲斐の戦国大名武田信玄と、越後の戦国大名上杉謙信は、5度にわたり信濃川中島で衝突をしました。信濃征服を押し進める武田信玄に対し、「領土欲のない」「義の将」である上杉謙信は、信濃国衆の本領復帰を旗印として掲げ、両雄は激突を繰り返したとされます。この結果、両大名とも上洛が遅れたとまで言われるほどでした。</p> <p>しかし実際の状況は、そこまで単純なものではありません。謙信は謙信なりに、川中島に軍勢を進めなければならない理由がありました。その点を、戦国大名のあり方とからめて考えてみたいと思います。</p>
講座No. 316011d	戦国期足利将軍家と政所伊勢氏
<p>大正大学専任講師</p> <p>木下 昌規</p>	<p>戦国期の足利将軍家は近年の研究成果により、従来イメージされていたような「傀儡」ではなく、武家秩序の頂点として、なお実態を維持した権力として存在していたことが判明している。</p> <p>本講座ではそのような近年の研究成果を踏まえたうえで、戦国期の将軍と将軍家を支えた人々について注目する。特に注目するのは、将軍家を身近に支えた政所伊勢氏である。政所伊勢氏は将軍継嗣の養育のほか、将軍家の経済や京都支配の一部を担当する政所の長官として重要な役割を果たした。しかし、戦国期になると、将軍家と政所伊勢氏との関係は必ずしも良好なものとはいえなかった。政所伊勢氏は政変の一端を担い将軍追放に関与したほか、独自の活動をして将軍と対立し、討伐され、一度は滅亡した。</p> <p>以上のように、戦国期の将軍権力をみるうえで、政所伊勢氏の存在は看過出来ないものである。彼等の動向を見ていくことで、戦国期の将軍権力の姿を見ていきたい。</p>
講座No. 316011e	織豊政権と徳川政権 ―その類似点と相違点を考える―
<p>國學院大學兼任講師・立正大学非常勤講師</p> <p>堀越 祐一</p>	<p>織田信長と豊臣秀吉が天下人だった時代は、まとめて「安土・桃山時代」と呼ばれるのが一般的で、これは広く浸透していると思います。もう一つ、歴史学界などを中心に使われている「織豊政権」という呼び方もありますが、要するに、信長・秀吉の時代は合わせて一つにまとめることができるし、またそうすべきだと考えられているわけです。時間的連続性や人的類似性に加えて、どちらも短命で終わった政権であるという共通点もあるため、一見当然に思えるかもしれませんが、一方で「豊徳政権」などとは誰も言いません。豊臣と徳川の両政権の間には、あたかも大きな溝が存在するかのようです。では、本当に織田と豊臣はそれほどまでに似通っているのでしょうか。また織田・豊臣と徳川とは決定的な差異があるのでしょうか。個人的には、実際には織田と豊臣には異質な点が多く、豊臣と徳川には多くの類似点があると考えています。もちろん相違していることも多々ありますが、徳川幕府は、秀吉によって初めて実施された政策をいくつも引き継いでいるのです。本講座では、三つの政権を比較検討してみようと思います。</p>
講座No. 316011f	水野氏からみた尾張・三河の戦国時代
<p>日本大学助教</p> <p>小川 雄</p>	<p>水野氏は、戦国時代に尾張・三河両国の国境周辺(知多半島)に一族を分立させ、緒川・刈谷・常滑などの諸家は、有力な国衆として、足利将軍家や戦国大名から一目置かれていました。その中でも、緒川水野氏は徳川家康の生母伝通院(於大)の実家であり、江戸時代に子孫が譜代大名・旗本として発展していきます。</p> <p>もっとも、緒川家の印象が先行して、拠点を近接させていた緒川家・刈谷家の動向が混同されること、常滑家の動向が十分に考慮されないこともあります。さらに各家に関する検証が、徳川将軍家の創業史に規定されて、実態から乖離する傾向も目立ちます。</p> <p>その一方で、戦国時代の知多半島をめぐる展開を整理していくと、水野一族の他にも、戸田氏・佐治氏などの国衆が割拠し、さらに尾張織田氏・駿河今川氏・三河松平氏の勢力が交差する「境目」として、東海地域の政治史に多大な影響を与え及ぼしたことが判明します。とくに永禄3年(1560)の桶狭間合戦では、水野一族の動向が重要な意味を持ちました。</p> <p>本講義では、緒川・刈谷・常滑の三家を中心とすることで、応仁の乱から桶狭間合戦に至る尾張・三河国境の政治情勢を読み解いていきます。</p>
講座No. 316011g	明智光秀の「実像」
<p>東洋大学非常勤講師</p> <p>柴 裕之</p>	<p>明智光秀は、織田信長の重臣として活躍しましたが、天正10年(1582)6月の本能寺の変で主君の信長を討った武将として知られています。信長を討ったことから、現在では「謀反人」また「革命者」信長についていくことのできなかつた「常識人」とされますが、その「実像」はいかなる人物であったのでしょうか。現在の信長・織田権力研究の深化をふまえて、改めて光秀についてその活動を追い、「実像」にせまりたいと思います。2020年には、光秀を主人公としたNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放映が予定されていますので、その「予習」としても活用していただければと思います。</p> <p>参考図書：『図説 明智光秀』戎光祥出版 柴裕之</p>